

## 後藤さん「定年」と伺って

建 林 正 喜

昨年一〇月一八日、神戸大学で理論・計量経済学会があつて出席したのですが、その会場でたまたま後藤さんにお会いしました。わたしは今年度は立命の大学院の講義を失礼しているのですが、後藤さんにお会いするのは久しぶりでした。「実は先輩の方々や友人に非常にお世話になつたので、ちよつとお礼申し上げようと思つて来ました」ということで、後藤さんが昨秋大内賞を貰われたことを、そのときはじめて知つたようなことでした。いかにも後藤さんらしい律儀なことだと感じました。その日は大学院の入試があるとかで、急いで京都へ帰られたようでした。そのとき後藤さんから「私もとうとう来年定年になるんです」と伺つて、年月のゆく迅さに驚いた次第です。しかし定年後どうなさるのか、まだ決まっていなかつたといふので、わたしにはすこし気がかりでした。わたくしも実は昭和四九年三月定年退職したので、そのときの心境をふと思ひ出しました。役職に追われ講義にくたびれ好きなこともできず、やりたい勉強も十分にはできなかった、ああこれで時間ができる、ひとつ大いにやってみようと思つた。まあそこそこの手当を貰えるならひきつづいて立命館で勤めさせて貰いたい、これも本当の心境でした。人口の老齡化が進むなかで、どことも定年を延長しようといふことで、これはムリな願ひではなからうと

思うておりました。しかし定年のあと特任で大学院の講義をもつようになったのはよいが、手当は半分以下がるし物価はドンドン上がるし、ついにダブルパンチを食らって現在の大学へ転出したのでした。後藤さんの定年のあとが決まっていなかったというので、ふっと頭をかすめたのはそういう思い出でした。

\*

後藤さんが立命館へ着任されたのは四四年の春、その二年前の二月（わたしが学部長で戸木さんが学部主事だった年だったと思うのですが、思い違いがあったらご免なさい）、学部の教員増が決まりました。当時学生定員三〇〇に對し予算定員六六〇、文部省の締めつけもしいに厳しくなるなかで、教員をふやさねばならないというので、各学部二人か三人の教員増の割当てが決まりました。そのときマル経の方の教員増もあったように思いますが、はっきり憶えているのは数学と近経、特に近経の方の教員増をどんな科目で埋めるか、ずいぶんホットな議論の末に国民所得論が決まったことです。その頃大方の一流私学ではこの科目が設置されていましたし、立命でもカリキュラム現代化の要請に沿うてこの科目を置こうということだったと思います。それで問題は適当な人があるかどうかということでした。わたしは立命に来る前の広島大学在任中に県の所得推計作業にタッチしていて、そのときの経験から国民所得論ということになると、どうしても所得統計の実務にも明るい人でないといけません。ことで、阪大の熊谷尚夫さんに相談しました。実はそのときの経企庁長官は大阪一区から出た故菅野和太郎氏、この方は京大本庄栄治郎先生の高弟で大阪市大教授から代議士になった人で、私も若い時ずいぶんお世話になりましたが、この方が何というか、学究的なふんい気を政治にとり入れようということだったのでしよう。熊谷さんを経企庁研究所の学者所長にすえたわけです。そういう経緯で熊谷さんに相談したところ「実はいい人がある。

後藤さん「定年」と伺って（建林）

うちの国民所得部長の後藤文治君だが、非常に地味な勉強家で役人にしておくのは惜しいひとだ」というような推薦がありました。四三年にはわたしは学部長の任期を終えて図書館長でしたが、行きがかり上、お前行って後藤さんに会ってこいということでも上京しました。

たまたまそのとき、京大の数学教授の小堀憲先生からお弟子さんの荒井正治さんの紹介推薦がありました。小堀先生は現在もううちの学外理事をなさっています。荒井さんはそのとき日大にいられたので、それじゃ何月何日に経企庁まで来て下さいというわけで、日には忘れましたが、お二人に会って話を決めてきたわけです。ところが翌四四年一月、例の寮の問題がきっかけになって広小路の中川会館が封鎖になり、そこが解除になると今度は恒心館が封鎖になった。わたしはひよっとすると後藤さんが来てくれなくなるのではないかと心配しました。まあいい工合に四月には後藤さん(もちろん荒井さんも)来て下さって一安心しました。

\*

後藤さんは何というか、よい意味でのマイスター肌の、つまりはったりもきかさないができないことは約束しない、その代り約束はガッチリ守ると云った地味で良心的な人柄の方です。後藤さんは大分県の出身、例の終戦のときミズリー号で降服文書に調印した重光葵氏と同郷で、重光さんを非常に尊敬していられます。後藤さんは東亜同文書院の出身、重光さんは駐支大使のとき爆弾で片足を失ったというところで、特に親近感があったのかも知れませんが、御兩人には何か共通のものがあるように感じます。ひたむきに実直なところです。それに思いやりの深さでしょうね。学部長だったときの疲労が一ぺんに出たのか後藤さんがみえた四四年は、私は逆も体調がわるかった。そのとき殆んど毎日のように後藤さんから電話でお見舞いを頂いた記憶があります。それから私が

眼の手術を受けたあと、銀座の眼鏡屋で見付けたんだといって大きな天眼鏡を頂いたことがあります。わたしは迎もうれしかったですね。今でも大事に使わせて貰っています。それにゼミの学生を大事になさることもうれしい。後藤さんが来られて間もなくわたしのゼミで先生を合宿ゼミにお招きしたことが縁で、のちに合同合宿ゼミを持ったこともあったように記憶しています。わたしのゼミナリストのあつまりは「あゆみ」と云って毎年一月に会合しますが連中の話によると後藤さんのゼミナリストの会合も盛大ときいています。後藤さんのお人柄でしょうか。

\*

先日ある県の統計課の方に会って偶然後藤さんの話が出ました。後藤さんは立命館へ来られたあととずっと経企庁の方の仕事にタッチなさっていたようで、これはさっきも云ったように国民所得論という科目の性格からしても当然であり、また必要なことでもありましょう。実は私が学部長の二年目でしたか、「商業都市における市民所得」「工業都市における市民所得」という題で二篇ほど『立命館経済学』へ載せたことがありました。そのときさっそく後藤さんから「先生、実はつい最近県市民所得推計の方法が変わったのですが、それをご存じでしょうか」と注意されました。そのとき後藤さんがこの改訂作業にずっと関係されていることも伺いました。定年後もひきつづきその方の関係で東京でお仕事があるのではないか、そういう印象を私はつよく受けています。さきの県の職員のひとつが、後藤先生は一見非常にもの柔かな方だが、しかしいっぺん云い出したら絶対にあとへ引かない方ですねと、苦笑しながら云っていました。この一徹さは初めに云った後藤さんの実直な人柄のほゞえましい反面で、わたしがこよなく敬愛するところですよ。

後藤さん「定年」と伺って（建林）

政府の調査によると、年とって生活のために働かなくちゃならんという人がずいぶん多いんですね。この状況は程度の差はあってもわれわれに共通だろうと思うんで、それを一応おいて考えれば、やっぱり何か仕事をしていて沢山の人の役に立っている、役に立ちたい、そういった自負とか期待は長生きしていく上にも必要だし、社会全体の活力になるのじゃないかと思うんです。

後藤さん、長いこと御苦労さんでした。これからも頑張ってよい仕事をなさって下さるよう念願します。それがわたしたちの立命館大学がさらに立派になる蔭の力になるにちがいません。